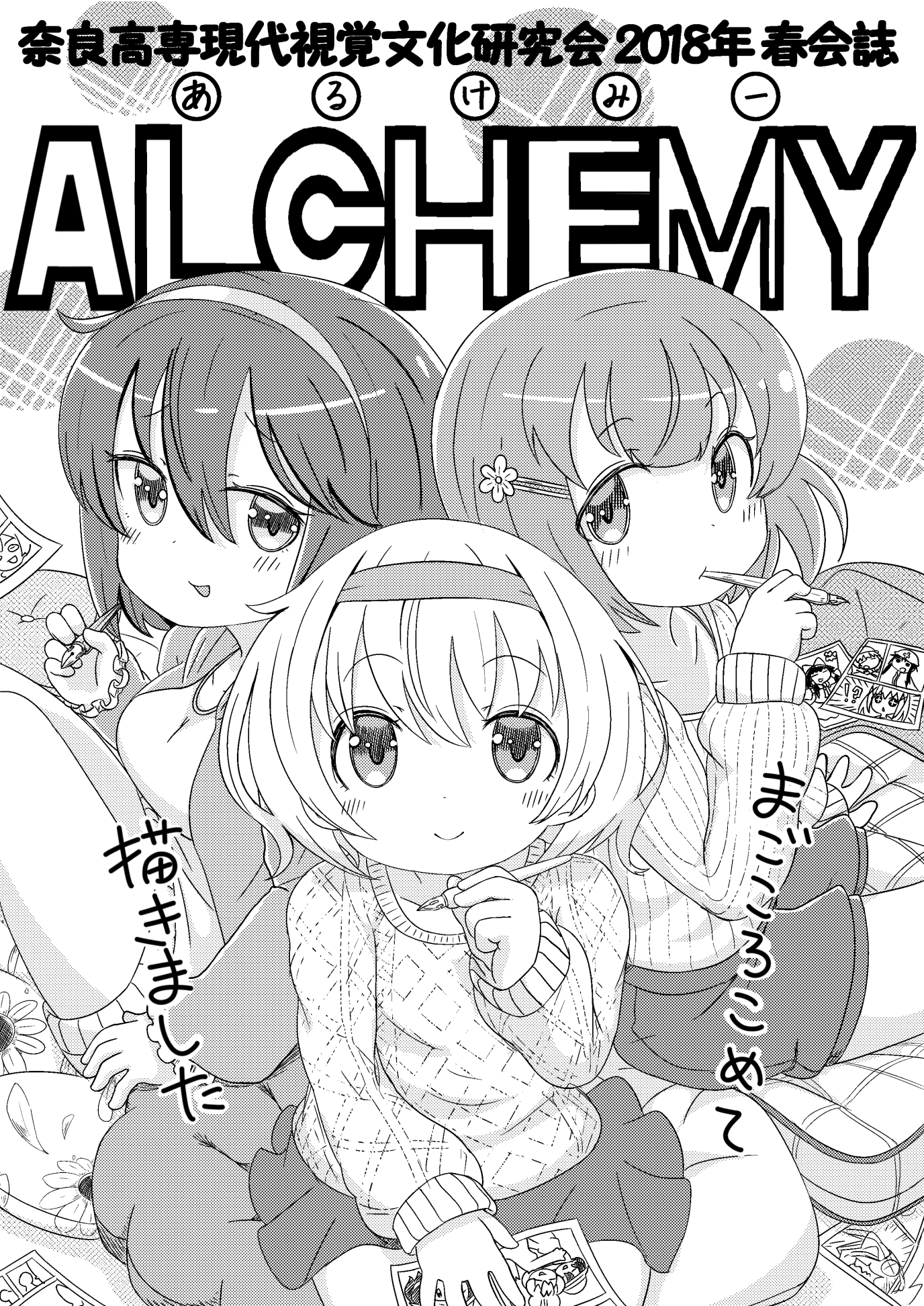
奈良高専現代視覚文化研究会2018年春会誌

あるけみー

ALCHEMY



まえがき

暖かい季節になって来ましたね。校庭の桜も……もう咲いてますかね？　それともう散ってしまったのでしょうか。とにかく、新入生の皆さん、入学おめでとうございます。はじめまして！　現視研会長のあっこどんです！

今回は「現代視覚文化研究会」、略して「現視研（げんしけん）」の春会誌を受け取って、さらにページを開いてくださりありがとうございます！

ページを開いてくださったということは、この会誌に興味を持ってくださったということですよね!?　本っ当にありがとうございます!!

……すみません、1人で大変熱くなってしまいました。本当に申し訳ないです……。

さて、現視研の紹介をさせていただきます。現視研って何をしているの？と聞かれますと、平たく言えば創作活動をしています。そしてその創作物を発表する機会が、年四回発行されるこの会誌なのです。他にも、同好会内で企画などを発表する機会はありますが、人々に自分たちの創作物を見てもらえる機会がこの会誌なのです。

あ、そうなんです。「部」ではなく「同好会」なんです。なので、「部に毎日顔を出しなさい！」とか、「部の会議や会誌は絶対全員参加しろ！」とかそういう厳しいルールは、特に無いんです。まあ、会誌のイラストや小説がゼロだとか会議に誰も来ないとかは、さすがにマズいし寂しいので、「みんな出してね？」「いついつに会議あるからみんななるべく参加してね？」程度の声掛けはするんですけどね。会議に誰も来ないとか寂しすぎて会長泣いちゃうぞ……イタい！　やめようか！　ぶりっ子ぶってもかわいくないし、見苦しいだけじゃん！　まあその話は置いといて、本当にそれぐらいゆる～く活動してる同好会なのです。

まえがきでこれぐらいはっちゃけてふざけても許してくれるはず……多分……まあダメだったその時はそのときなんですが。

あまりにもグダグダすぎる説明でしたが、もっと気になった、詳しく説明プリーズ！な方は、ぜひ「課外活動共用施設」という運動部の部室がズラーッっと並んでいる施設の中にある現視研の部室に活動の様子を見に来てください。個性的な先輩方が、皆さんをお待ちしています。

最後に一言。

みんな！　現視研で一緒に創作活動しようぜ！　イエーイ！

以上、こんなくだらないまえがきに最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。次ページからの作品で最後まで楽しんでいってください。それでは！

あっこどん

もくじ

小説作品

4　僕は、影から　TEXTER
6　終わりの始まりの一幕　キツタヌ
8　恋花の病　如月　吟
12　白猫の嘆息　しゅう
16　混昔物語　若葉
20　ニンギョウ喜劇　えのぐふで

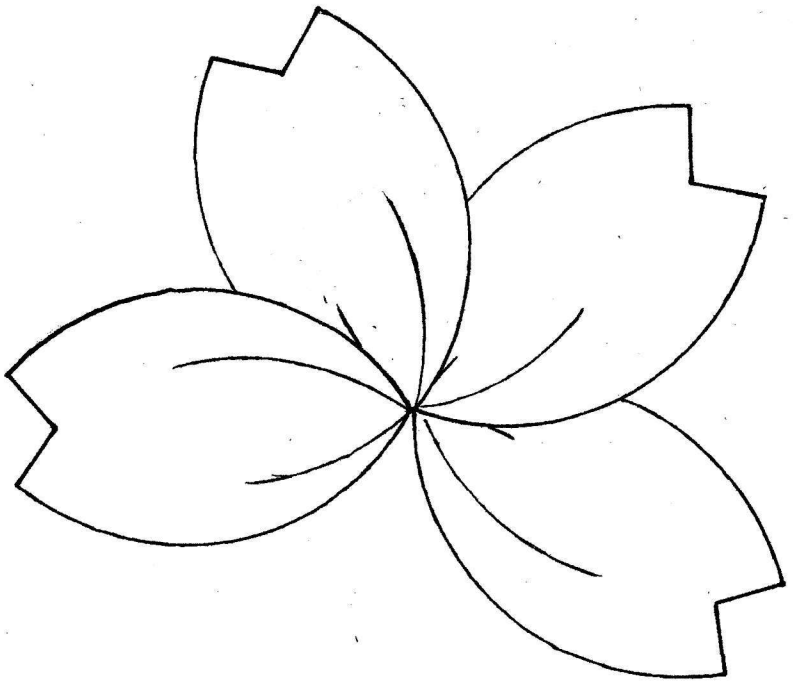
イラスト作品

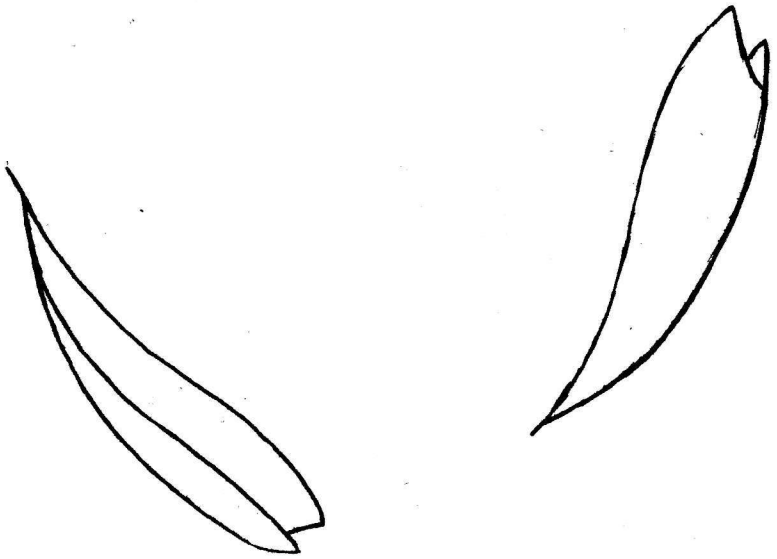
24　さん
25　くろうと

28　自己紹介

表紙　猫にゃん
扉絵　くろうと 如月 吟

文章作品





僕は、影から

TEXTER

僕は今年からこの五年制の学校、高専の学生だ。
二年目にして、好きな人ができた。それは、クラスで唯一の女子だった。
説明をしておくと、高専は工業的教科を重点的に学習できる共学校である。
だが入学してみれば、いや入学しなくともネットや高専祭の様子から、女子が少ないことが簡単に伺い知ることができる。共学ではあるが、軽く紹介するときには男子校と呼ばれることも少なくない。

という理由があり、女性であればだれでもかわいく、ないしは美しく見えたりするという症例が発生することがある。これは高専病と通称され（実際の医学的・精神的な病気ではないが）、またその呼び名が存続する程度にはよく見られる状態なのである。
すると当然の疑問として、僕自身の状態はそれではないか、と疑ってしまうのは当然のことである。
好きという状態がどのようなものなのか、それを理解できるような経験は存在しない。
恋愛ジャンルの小説や漫画に触れ合ったことはあるが、それと似通っているということくらいしか見当がつかない。
僕はただ、そのときのぼんやりとしたもどかしい気分に浸っていた。
相手のことが好きなのだとしたら、次に行うべきアクションは告白だろうか？
それとも。しかし、積極的に行動するよりは、このままのんびりと眺めているほうが幾分も心地良いような気がした。
知らぬが仏、というわけではないが、彼女の意思を確認するよりは、このまま彼女は僕のことが好きかもしれないという勝手な妄想を膨らませているほうが幸せかもしれないと思ったのだ。
プラスになるかもしれない、しかしマイナスになるのがうっすらと怖くて、ただよく分からない日々を過ごしていた。

だから、とても驚いた。彼女が僕に話しかけてきたことに。
それは五月、新年度にも慣れてきた頃だった。委員会でも実験班でも接点のなかった彼女から、相談に乗ってほしいと言われたのだ。
数瞬（すうしゅん）はほのかな嬉しさと緊張を感じた。同時に、自分と同じ感情を抱いているのかと期待した。
しかしそれを快諾した後、すぐにその期待は裏切られるだろう事を直感した。
期待が裏切られるだろうと思ったことは、実際にそうなったときのダメージを減らす予防線だったのかもしれない。
しかし、これはあくまでも直感だった。なぜだか彼女の顔を思い出すと、ありえない、と感じた。
振り払おうとして、頭を何度も振った。
果たして彼女の口から飛び出した言葉は、好きな人とデートの約束をしたが、どこに行けば分からないということだった。
恥ずかしそうに口を開いた彼女を、僕はどこか他人事みたいな感じで聞いていた。
「え、それをなんで僕に聞いたの」
「だって恋愛のこと詳しそうな顔してるじゃん」
どんな顔だよと突っ込んだ割とどうでもいいやりとりは、その後も長く記憶に残っている。ショックがなかったと言えば嘘になるだろう。しかし、僕は予期していたよりもダメージを受けていない自分に気付いた。
予防線を張ったお陰だろうか。よく分からない。
もやもやとした感情は相変わらずもやもやとしていたのだが、そ

の質が幾ばくか変化したように感じた。

それにしても、そのときの僕はバカ正直にデートスポットを教えていたような気がする。

当然ながら僕は恋愛について詳しくない。だから憶測で語ったし、彼女も詳しそうと言ったのは冗談のようだった。

悔しいとは別の、この混ざり合う感情の呼び名を探していた。

そして僕はこの感情に思い悩むようになった。

その後も彼女は頻度こそ高くないものの、何度か恋愛の相談をもちかけてきた。

僕はそのたびに応じた。

それでこの感情は不快なものではないことを発見した。

どんな条件でこの感情が生成されるのか考えた。どのような入力に対してこの感情という出力が得られるのか考えてしまうのは、極めて理系的な思考かもしれない。

自己ループしていたこの時間はとても無駄だと思ったが、それを止めることはできなかった。廊下ですれ違う隣のクラスの女子も何度か見たが、ずっと考え続けている感情に類する反応は得られなかった。どうしてかそれが当然なことのように、前提として存在していた。

彼女は変わらなかった。

なにも言っていない僕の好意を、彼女が察することはない。強いて言えば、楽しそうだったり、悲しそうだったり、いろいろな表情をする彼女を見るのは好きだった。そして彼女が困っているときは何か手助けをしたい、力になってあげたい、と思った。

力になってあげたい。なんて言ったら、彼女は上から目線だと怒るだろうか。

僕も彼女との関係が変化してしまうのを恐れ、彼女の求めること以外は特に話さなかった。

そして今日気付いた。とある日曜日のことだった。

なにか本でも見ようかと、家から少し遠い書店に行った日のことだった。

彼女を見かけたのだ。違うクラスだろう、知らない男子も一緒だった。

悔しさや寂しさは不思議と少ししか感じなかった。

ただ、幸せそうに小さく手を振る彼女とその隣の男子に、ふとお似合いだなと思ってしまった。

それでいいと思った。

僕は彼女が幸せそうに笑うのを見て満足のような何かを感じた。

僕はただ、彼女が笑顔でいてくれるだけでよかったのだ。

そして彼女が、僕がいなくとも幸せになれるのであれば、それで問題なかった。

彼女につられて、僕も軽く笑い返す。

この一瞬は何倍にも引き伸ばされたように感じられた。

こんな気持ちは恋とは呼べないだろう。ましてや、恋愛的に好きだったのかさえも今となってはよく分からない。

結局、好きという感情についてはよく分からないままだった。

いつ始まったのか、そもそも始まっていたのかも怪しいが、もう終わったということだけは理解できた。

それでも僕は、彼女が幸せそうにしているのを見るのが好きだった。

了

終わりの始まりの一幕

キツタヌ

私は今日、貴殿らに新しい演目を捧げよう。

これは、物語の始まりでもあるが平穏の終わりでもある。

これまで、何の問題も無く駆動し続けていた機構が破綻する。

それを構成していた歯車達が唐突に軋み、砕け散ることによって。

原因なんてものは追究する必要はない。大事なことは、その世界に無くてはならないモノが無くなってしまった、ということだ。それによって、世界はゆるりと、しかし確実に狂い始めていく……。

悪いが、私は前語りが苦手でね。本当は俺……私ではなく、語りが上手く、人当たりも良いのが今日ここに立つ予定だったんですが、少し事情がありましてね。

さて、

さぁさぁ！　今回貴殿らが味わうのは、どこにでも溢(あふ)れる日常譚。

冒険も勇気も愛もケモミミもしっぽも何も無い話ではございますが、それ故に得るモノがあり、それ故にあり難いモノでもあります。

◇　　◇

人成らざる異形のモノ達が表社会に出てきて長く短い時が過ぎた。

細かい話はこの話には不要だ。ただ、人でないモノと人が共存の道を歩み始めたばかりの頃の話だと理解しておいてくれ。

どこにでもありそうな住宅街の道路に赤い巨体が二つと小さな人影があった。三人とも着ている制服から同じ学校に通う女子生徒であることがうかがえる。大きい二人が怒鳴っているところから、とても友好的な関係には見えないが。そこに、怒鳴られている女子生徒より小さい人影が怒鳴っている異形のモノ――所謂『鬼』と呼ばれている種の二人に近づき、突如光と共に手の中に現れたバットを大きく振りかぶって、天高く吹っ飛ばした。呆然とする少女にどこかやりきった感が漂う少女。凡人には訳が分からない光景であった。

先祖をどこまで遡っても人間という種で統一されている普通の少女、新雪(しんせつ)　綾音(あやね)は昨日の放課後に自分を助けてくれた小柄の少女を学校の昼休みを使って探していた。着ていた制服から綾音と同じ学校に通っていることは分かっていた。鬼を容易(たやす)く退けていた所から彼女は純粋な人間ではないのだろう。両親にはやっかい事に巻き込まれない為に、異形のモノに関する人には近づかないように言われているが、助けてもらったのだからお礼は言わなくてはいけない。と思っての行動だった。

とりあえず、自分と同じ一年生の教室を覗(のぞ)いてみたが見当たらなかった。もちろん、購買や学食、自動販売機に行っている可能性もあるのだが。二年生の教室を覗きに行こうかと思っていると、空き教室のはずの場所から笑い声が聞こえてきた。僅かに開いていた扉の隙間から中を覗くと、件(くだん)の彼女が友人らしき人物たちとお昼を食べながら話しているのが見えた。見つけたのはいいが、話の邪魔をするのも無粋かなと出直そうとしたところ、中から透き通るような声が聞こえてきた。

「私達に何か用事かしら？　かわいい可愛い人間サン？」

バレてしまっていたようだ。別にやましいことをしているつもりはないが、その声を聞くとなぜだか無性に恥ずかしくなってしまった。ともあれ、昨日のお礼をしようと扉を開けて中に入ることにした。

中に居たのは、明らかに平均以下の身長で短い黒髪の綾音を助けてくれた少女、腰まである艶のある美しい墨色の髪を持つおしとやかそうで、しかし凛とした雰囲気を漂わせている少女、金髪で肌は白いが活発そうな豊満な胸を携えた少女、制服を着崩した明らかに手入れをしていないボサボサの黒い長髪を持った少女、の四人だった。

彼女達の名前は順に明日香（あすか）、理美（りみ）、響子（きょうこ）、楼花（ろうか）というそうだ。ただお礼をしに来ただけなのに、何故か綾音も会話の中に入れられ、そのまま昼休みが終わってしまった。

それからも。昼休みになると綾音の教室まで四人の誰かがやって来て、例の秋教室へと強制連行された。綾音は初めから迷惑とは思っていなかったが、時間が経つに連れこの関係、この時間がむしろ心地よく感じていた。

そんなある日……

（休幕）

っほい、少しばかり早いがこれから長くなるから、一幕目は終わりだ。貴殿らは次の幕に備えて休憩してください。

ん？　どうしたんだ？　まだ一幕目、一回目の休憩だぞ？

気がついたらここにいた？　鑑賞代を払っていない？　そんなものを気にしなくてもいいのに。

どうしても帰る、か。まぁ、それが正しい判断ではあるな。

私たちは、愚者は喰らうが賢者は喰らわないですから。

外ではまた新しい周期を刻み始める時期なんだろう？

ならば、遅れないようにするといい。

無事に家に帰りたかったら、ここを出たら右に進むんだ。曲がり角も全て右に曲がるんだ。違和感を感じても、右に、右にだ。

走る迄（まで）はしなくていいけれど、速足で行くといい。俺は、っとと、私は語る速さをバレない程度に遅らせるぐらいのことは出来るが、立ち止まってはいけない。

どうか、健全に。

あぁ、後、ここでの出来事は綺麗さっぱり全て忘れるんだ。

いいね？　覚えていてはキミに破滅こそ齎（もたら）せるが良いことなんて何も無いからね。

さぁ、行け！

……もしも俺達なんかを見ている存在なんて居たとしても死神ぐらいなんだろうが、この際、何だって良い。

――彼の者が幸せでありますように――

了

恋花の病

如月　吟

あれは、桜が咲き乱れる土手沿いの通学路でのことだった。僕は高校に入学したばかりで少し浮足立っていた。行きたかった学校の制服、絵になるような景色、気だるげでいてどこか楽しそうな周りの声。どれもが僕の心を満たしていった。

そのとき、ふといい香りがした。花のような甘い香りとシャンプーの香りだ。香りの源は僕の後ろに行くのを感じた。僕は香りに釣られるように後ろを向いた。しかし、背後には同じ方向に向かう同じ制服の人たちしかいなかった。

「あれ？」

目を凝らして探してみても見つからなかった。そのため、香りに関しては僕の気のせいと考え直した。そして、通学路を満喫しながら僕は学校へと歩みを進めた。このときから運命の歯車は回り始めていた。

昼休み、屋上で同じ中学の友人と弁当を食べていた。

「アー、授業マジ疲れるわー」

友人は大げさにアピールしてきた。確かに高校の授業は中学の頃よりも格段に難しくなっていた。そのため、友人の言うこともわかる。でも、難しくなるからこそ面白くなると僕は感じていた。

「確かに疲れるけど、面白いとも思うな」

「お前は真面目だな」

「そうかな？」

「授業を面白いって言ってる奴は大体真面目だ。それに、大多数はつまらなく感じてるんじゃないか？」

友人はカラカラと笑いながらそう言った。僕は解せぬと思いながら、昼休みを過ごした。

放課後、友人と駄弁りながら帰路についた。

「やっと、終わったー」

体を伸ばしながら友人はそう言った。関節からはパキパキと乾いた音が聞こえてきた。

「お疲れ様。でも、宿題もあるよ？」

そう言うと友人は死んだ魚のような目になった。そこまで宿題が嫌なのかと内心考えていた。

「そんなのも、あったな」

「……嫌なの？」

僕は不思議に思った。宿題は授業で教わったことの理解を深めるためのもので、面白いと感じるものだからだ。

「嫌だよ。というか、宿題は面白いとか考えてただろ？」

「うん。考えてたね」

「その思考が理解できないな」

友人とそんな風に駄弁っているといつの間にか土手に着いていた。僕はその景色を見て、今朝の出来事がふと思い返された。地に足がつかないような浮かれた気持ちも、絵になるような景色も、登校する学生たちの声も、そして僕の鼻をくすぐった甘い香りのことも。あまりに沢山の情報量に処理しきれず、少しの間ぼんやりとしていた。

「……ん？　どうした？　気分でも悪いのか？」

友人は僕の顔を覗(のぞ)き込んで様子を見ていた。

「あ、うん。大丈夫」

「そっか。でも、気分が悪くなったらいつでも言えよ」

「うん。ありがとう」

僕は友人に心配されながら、家へと帰った。あの甘い香りは僕の中でより一層強いものなっていた。

あの日から、僕の中であの甘い香りはどんどん忘れ難いものにな

った。どんなときでも思い返すようになった。面白かった授業も頭に入ってこなくなり、四六時中あの香りについて考えるようになった。僕は、あの香りに囚われてしまった。そんな僕の異変に気付いたのは友人だった。

「お前、やっぱり変だって。授業も集中してなかったし」

「大丈夫だって。心配しすぎだよ」

僕は友人を安心させようと、大丈夫かと聞かれたら大丈夫だと言い続けた。僕は大丈夫だ、心配いらないと。そんな言葉を友人にかけ続けた。

「お前、本当の本当の本当に大丈夫なんだろうな？　ものすっごく顔色が悪いけど……」

「本当に大丈っ！」

いつもの言葉をかけようとしたとき、吐き気を催した。我慢できるようなものではなく、咄嗟（とっさ）に口を押えて、地面に蹲（うずくま）った。

「おい！　どうしっ、大丈夫か！」

「っう、ゲホッ、ゴッ、……ゲヴォ。……ハァ、ハァ、ハァ」

「……なんだよ、これ」

僕は何とか呼吸しながら、現状を整理していた。隣で背中さすっていた友人も似たようなことを脳内で行っているのだろう。なぜなら、僕が吐いた辺りには、沢山の花弁が唾液で輝いていた。

「これは、どういうことだ？」

「……わからない」

僕たちは花弁をカバンの中にあったビニール袋に回収して、家へと歩みを進めた。

翌日の昼休み、僕たちはいつもと違い無言のまま屋上で弁当を食べていた。それもそうだ。昨日、道の端ではあるが食べてもいない花弁を吐き出した僕と昼食を共にしているのだから。そんなことを僕は考えていた。無言で重苦しい空気の中、会話を切り出してきたのは友人だった。

「昨日のあれは何だったんだ？」

直球の質問が飛んできた。オブラートにも包まず、直接的表現で友人は聞いてきた。

「……、花吐き病」

僕は一言そうつぶやいた。

「なんだそれ？」

「初恋をこじらせるとなる病気で、感染経路は接触感染。花弁に触れば感染するんだって」

僕は淡々と話した。正直、いまだ現状を整理できていない。人間が花を吐き出すなんて気持ち悪いと思えて仕方がないからだ。

「初恋って……。心当たりはあるのか？」

「……あるには、あっ！」

心当たりを考えたら、あの甘い香りが思い返された。そして、胃から逆流してくるもの感じた。

「大丈夫か⁉　吐きそうなのか⁉」

友人は予想していたのか、手持ちのビニール袋を口元に持ってきて背中をさすってくれた。

「ゲヴォ、ゴホッ、……ヴォエッ、……ハァ、ハァ、ハァ」

ドサッドサッと花弁が口から吐き出せれて袋に入る音が響いた。そして、屋上には僕の吐く音が流れ続けた。そんな中、友人はずっと背中をさすってくれた。

「大丈夫だ。大丈夫だからな」

友人は背中をさすりながら、僕を安心させるように声をかけ続けてくれた。静かに、ただ静かに声をかけてくれた。

放課後、いつものように僕たちは一緒に帰っていた。

「昼休みは悪かったな」

友人は昼休みのことを悪く思っていたようだった。僕は別に気にしてはいなかった。心当たりに関しては誰もが気になると思ったからだ。

「別に大丈夫。それよりも、昼休みの僕のほうこそごめん、迷惑かけて……」
「別に迷惑とか思ってないし、お前は病気にかかってるんだから少しは自分の心配しろよ？」
友人のこんな優しさが身に染みた。とても温かいもので心が満たされるのを感じた。
「うん、ありがとう」
僕の心配をしてくれて、僕のことを見捨てないでくれて、僕の友人でいてくれて、とは言わなかった。けど、いろんな感謝をありがとうの一言に込めた。
「それで、昼休みの続きだけど、心当たりはあるんだな？」
「うん」
やはり、あの甘い香りが脳裏をよぎった。ただ、そこまで強く思い返すことは無かったため、軽い吐き気だけで済んだ。
「それでどうするんだ？」
「どうするって？」
「告白だよ」
こくはく？　コクハク？　頭の中で告白の文字がゲシュタルト崩壊しながら頭の中をグルグルと回り続けた。
「…ッ、こ、告白ぅ!?」
「そう、告白」
「告白って、告白って、まだ心の準備が！」
「……初心なんだな」
その後、僕はパニックになったのかあまり覚えていなかった。

自室で僕はずっと考えていた。
「告白、か……」
見ず知らずの相手に恋をした。そのことを考えると僕自身にゾッとする。それと同時に周りとずれた自分にも周りと同じような感情が、心があることに嬉しさを感じた。
「初恋の相手って誰だろう」
そんなことを考えていると、吐き気がこみ上がってきた。更に慕っている甘い香りが脳裏をよぎり、激しい吐き気となった。
「ヴッ、ヴォエッ、ゴホッゲホッ、……ウッ、ヴォエェ」
沢山の花弁がゴミ箱のビニール袋に入る音が部屋に響いた。吐き気の激しさが、恋の激しさを表しているなんて悲しくなる。
「……ハァ、ハァ、ハァ」
吐いた後の呼吸音が空しく響き続けた。

花吐き病を発症して、一週間が過ぎた。僕は吐くことに慣れた。もちろん人前で吐くことにではない。なるべく体力を消費せずに吐くことにである。正直、僕は嫌な慣れだと思った。他の人もそう思うだろう。
「おはよう。体調はどうだ？」
背後から友人の声が聞こえた。
「おはよう。体調は、まあまあかな」
友人は僕の横に来て、顔色を見た。
「……うん。本当に良さそうだな」
僕の言うことは信用無いのだろうか。今までのことを振り返ってみると、僕の大丈夫は全くあてにならないことがよくわかった。僕はその事実に少しショックを受けた。
「それよりお前、なんか機嫌が良いな。なんかあったか？」
「いや、なんか良いことが起こりそうな予感がしてるだけなんだ」
「ふーん、そっか」
少し冷たい反応にちょっと悲しくなった。顔には出てないと思っていたのだが、意外にも表情に出ていたらしい。友人は僕の頭に手を載せてワシワシと撫でてきた。
「そんな悲しそうな顔するな」
手のひらから伝わってくる温かさが友人の心の温かさなのだと感じた。

放課後、珍しく僕は一人で帰っていた。土手沿いの通学路を夕暮れ時に歩いていた。桜は舞い散り、写真に撮りたくなる美しさだった。風が吹きぬけた。僕の鼻をくすぐったのはあの甘くて胸を締め付けるような香りだった。

「ヴッ！」

例の吐き気がこみ上がり、道端で蹲った。

「大丈夫ですか！」

前方から女性の声が近づいてきた。香りも強くなり、吐き気が一層強くなる。もうだめかと思ったときだった。

「気分が悪っ、ゲフォゴヴォ、ヴォエッ！」

彼女の口からは僕とは違う種類の花弁が吐き出された。そして、僕は大きな衝撃を受けた。僕の思い人も花吐き病だった。

「……えっと、大丈夫ですか？」

あまりの衝撃に吐き気を忘れ、明らかに気分の悪くなった彼女に声をかけた。

「ハァ、ハァ、……ハァ、もう大丈夫です。ごめんなさい、気分を害することをしてしまって」

彼女はどうやら花を吐き出してしまったことで、僕の気分を害したのではないかと思ったらしい。

「大丈夫ですよ。僕も同じ病気だから」

「えっ!?」

彼女は心底驚いた顔をしていた。

「風が吹いたとき、貴女の香りがしてきて、花を吐き出しそうになりました」

僕の心は、いつもより落ち着いていた。冷静で、僕と彼女以外に誰もいないのではないかと錯覚してしまうほど何も聞こえなくなった。

「私は、貴方の香りで発作を起こしました」

彼女も僕と同じだった。そのことにどうしようもなく嬉しくなった。

「僕たちって似ていますね」

「花吐き病について、ですか？」

「ええ」

会話は続く。僕の思い人は目の前にいる。にもかかわらず、吐き気は全く来なかった。それでも、彼女なのだと感じてしまった。

「突然、良いですか？」

「……はい」

僕は深呼吸した。やはり、重要なときには心臓が高鳴る。そして、胸が苦しくなる。逃げたい、逃げて楽になりたいと思ってしまった。それでも、僕は男だ。男を見せたい。すべてを押し殺して、冷静を装った。

「……貴女のことが好きになってしまいました。僕の恋人になってくれませんか？」

彼女は目を丸くして驚いた。それはそうだ、発作を引き起こす相手だとしても初対面の相手だ。名前も知らない相手なのだ。驚くのも無理はない。僕はそう思った。

「……」

彼女はまだ何も言わない。突然のこととは言え突然すぎたのだろう。彼女は呆然としていた。だが、すぐにハッと我に返り、深呼吸をした。彼女も心を落ち着かせたいのかなと思った。

「……こんな私で良ければ」

僕は目の前が真っ白になった。嬉しすぎて、何を考えているのか分からなくなるくらいに。呆然としていると、今までとは比べ物にならないくらいの苦しさがこみ上がってきた。

「ガハッ！」

「ゲホッ！」

僕と彼女は同時に何かを吐き出した。それは、二輪の白銀の百合の花だった。

了

白猫の嘆息

しゅう

べつに、大したことをしたわけじゃない。
しかし。しかしだ。こんな理不尽な結果を招くとは、思っても見なかった。
「はぁ……」
僕は、大きなため息を溢(こぼ)した。

目を覚ました僕は、ひどく憂鬱な気分に襲われた。「悲しい」とか「ツライ」とか、そんな次元じゃない。おそらくだが、今の感情を表せる言葉は、どこにも存在しない。
どうして、こんなことになったのだろうか。どうして、僕がこんな目にあわねばならないのだろうか。頭のなかで何度も反芻(はんすう)していると、再び僕の口からはため息が漏れた。
頬にそっと触れれば、今まで感じたことのない優しい感触が返ってくる。僕の肌はこんなにも柔らかくて、透き通っていて、みずみずしかっただろうか。
頭を少し動かせば、たらっと落ちた長い髪が目を覆い隠す。決して髪が短い方ではなかったけど、それでもこんなに長くはなかった。いやそれ以前に、僕の髪はこんなに白い、絹のようなものではないはずだ。今まで一度も、染めたことがないのだから。
「はぁ……」
また、溜め息が出た。
目の前に置かれた姿見には、一人の少女の姿が映っていた。全くサイズの合っていないパーカーに真っ白な髪と顔をうずめ、今にも泣き出しそうな、一人の美少女が。小学生くらいだろうか。小さくて、今にも壊れてしまいそうなほどに儚(はかな)くて。でも、僕の部屋には、僕しかいないはずなのに――いや、そもそも鏡とは真正面から向き合っているはずなのに、僕の姿はどこへ行ってしまったのだろうか。
「はぁ……」
なんど溜め息を漏らそうとも、その答えが分かることはなかった。

◇　◇

僕は、青井(あおい)　響(ひびき)。至って普通の男子高校生だ。
家族には、母と父と、あとは大学生の姉がいる。母は夜中までパート、父は大阪に単身赴任中、姉は学校とバイトで忙しいらしく、昼間はいつも僕しかいない。
僕がこんなことになったのは、学校の帰り。いつもの通学路を歩いているときだった。

僕の家は、住宅街の中。やはり住宅街とだけあって、大通りから少し入っただけで、突然車通りが減る。
きれいに区画分けされた家が立ち並ぶ中、僕は制服姿で歩く。見慣れた景色をぼーっと眺めながら、僕はふと、道の真ん中で立ち止まった。
「ねこ……」
僕の目線の先には、一匹の猫がいた。真っ白でふわふわ。つぶらなブルーの瞳がこちらを見つめている。
飼い猫なのだろうか。少し手招きすると、なんの警戒心もなくこちらへ歩み寄ってきた。僕も恐る恐る手を触れると、わふっとした空気を含んだ感触がかえってきた。
……かわいい。
首元を掻(か)いてやれば、だらしない顔を浮かべて気持ちよさそうにしている。自然と僕もだらしない顔になっていることだろう。今度あったら、おやつでも持ってきてあげようかな。
そんなことを考えているときだった。
突然、交差点から車が現れた。いや、道路なのだから車くらい通

るだろう。だがスピードが問題だった。それは明らかに、入り組んだ住宅街を走るときのものではなかったのだ。
　僕たちは道路の中央。しかも、猫相手にじゃれ合っている。避ける暇なんてなかった。……いや、車がもっとスピードを落としていたら、ちゃんとブレーキが間に合って、停止できたのかもしれない。
　しかし、車はブレーキをかける様子すらなかった。もう間に合わない。遅すぎた。しょせん、最期の悪あがきだとは分かっていながらも、僕は猫をぎゅっと守るかのように抱きかかえた。
　一拍おいて。ボンッという、思ったよりも軽快な音が最後に聞こえた。

　……そして、最初に至る。
　目を開くと、僕はいつのまにかベッドの上で寝ていた。
　鏡には一人の少女が映っている。白い髪に、青い瞳。肌はまるで陶磁器のように白い。街中で出会えば、見惚れてしまいそうな……といっても、まだ十歳ぐらいの子供なので、一人の女性としては見るとなれば、微妙なところだろう。
　問題は、その少女が自分であるということだ。
　僕は純粋な日本人で、こんな外国人的な容姿はしていないはずだ。いやそもそも、僕は男だ。それなのに、股間の部分を襲う喪失感と、鏡が突きつける現実が、僕が今どのような状況に置かれているのかを物語っている。
　……これから、どうすればいいのか。
　丁度都合よく家には誰もいないが、もうすぐ帰宅するだろう。ずっと、誤魔化すのは無理だろうし。いやでも、誤魔化しつづけなければならない。
　――ガチャ。
　そんなことを考えていると、タイミング悪く姉が帰宅した。いつもなら「おかえり」などと言っていたが、声まで変わっている今、そんなことはできない。僕は焦りつつも少し考えて、携帯でメッセージを送った。
『へやにはいらないで』
　焦ったせいで、全部ひらがなになってしまったが、この際どうでもいい。すると、姉からは「どうしたの？」というスタンプが送られてきた。
『なんでもない　部屋にはいらないで』
『？　まあいいけど』
　なんとか誤魔化せたみたいだ。僕はドアの前でへたり込んだ。メッセージだけで、こんなに緊張するなんて……。
　でも問題が片付いたわけではない。水や食べ物、そしてトイレやお風呂だって必要になってくる。目を盗んで行くことになるだろうが、いつかはボロが出てしまうだろう。
　――トイレ？　そういえば、さっきからじわじわと尿意が……。
　といっても、まだまだ我慢はできるだろう。でも、安全な今のうちに行っておかないと、後々タイミングを逃す可能性もある。そうなったら……考えただけでもゾッとする。
　とにかく、やるなら今しかない。僕はドアに耳をつけ、外の音の様子を確認した。
　物音は聞こえないので大丈夫なようだ。そしてそっと扉を開けると、忍び足で廊下を歩き、何事もなくトイレの前へたどり着いた。ミッション成功である。
　ドアを開け、中に入る。いつもとやり方は違うので戸惑ったが、正直無我夢中というか。トイレごときに集中するのもおかしな話だが、意外とすんなりできた。
　そして、僕がドアを開けると、
「響、さっきはどうしたの……って、誰？」

「……う……あ」
そこには、姉が立っていたのだ。あんなに注意していたはずなのに、どこかで油断してしまったのだろうか。
僕の背中に、ひやりと冷たい汗が流れた。毎日会話しているはずなのに、今まで感じたことのない緊張感に苛まれる。お陰で言葉もうまく出すことができなかった。
「大丈夫？　日本語話せる？」
僕の容姿を見て、外国人だと判断したのだろう。僕は、うんと頷(うなず)いて肯定する。
「親御さんは？　どうしてここにいるの？」
質問攻めにされた。当たり前だ。当たり前だけど、姉は僕のことにはまったく気がつかない。わかってはいたけど、やっぱり悲しい。自分が自分として認められないような、そんな気分になってくるのだ。
……でもこのままじゃダメだ。このままなにも言えなかったら、ずるずると引きずって、伝える機会を失ってしまうだろう。僕は目を見つめながら、ややけくそ気味に言った。
「僕だよ、響！」
「へ？」
目を見開いて驚く僕の姉。その表情を逐一伺いながら、僕はずっとドキドキと心臓の鼓動を速めさせていた。
「どういうこと？　驚かせようとしてるの？」
「違う！　僕がその響なんだって！」
「でも、響は弟だし……」
一々否定する僕の声も、可愛らしい女の子の声で嫌になる。説得力は皆無だ。自分でもわかるくらい、僕の面影は残っていないのだ。
最初から、ずっと初めから分かってはいたけど、なかなか信じてもらえない。自分の存在を否定されたような気持ちがして、なぜか耐えられなくなった。
「僕なのに……僕が響なのに……」
「ちょ、ごめん、泣かないで!?」
そんなつもりは無かったのに、正直な気持ちには抗えなかった。瞳から溢(あふ)れる涙は、ぽろぽろと床へ落ちていった。必死にせき止めようと頑張ったけど、なぜかダメだった。

◇　◇

「わかった、信じるから。響なんでしょ？」
一通り泣き終えた後、僕たちはリビングで向かい合って座っていた。まだ完全に信じている様子ではなかったが、大きな進歩であった。
僕はとりあえず、こくこくと頷く。
「どうしてそうなったのか、説明してくれる？」
なんというか、小さい子を諭すような口調だ。見た目が見た目だから、仕方ないと言われればそうなのだが。
とにかく、僕は一生懸命説明した。猫と一緒に戯れていたこと。それから、車に轢(ひ)かれたこと。そして、気づいたらこんなになっていたということ。なんだか舌足らずな話し方になってしまっているけど、気にしたら負けだ。
すると、姉は一瞬僕の顔を見ると、うーんと考え込んだ。
「それって、本当なの？」
「うん」
「本当に？　ドッキリとかじゃなくて？」
「さっきから言ってる！」
にわかには信じがたいといった表情をしている姉に、僕は思わずそう声を荒らげた。手を高々とあげて怒る様は、我ながら子供みたいだなと自分でも思った。
「まあまあ、そんなに怒んないでよ。響ちゃん」
「ちゃん、って言うな！」
妙にニヤニヤしながら、僕のほうを見る姉。何分か前の疑いの表

情とは違った、弄んでやろうという明確な悪意がこもっている顔だった。ここでようやく、僕がからかわれているのだと気がついた。してやられた。仕返しにキッと睨んでやったけど、特に効果はなかった。この体のせいだろうか、解せぬ。

心のなかでさらに抗議の念を送っていると、いきなり、僕の頭の上に手がポンと置かれた。

「まあ、全然信じられないけど。でも、響なんだろうね」

そう小さな声で呟いていた。周囲の物音に紛れるくらいの小さな声だったが、僕の耳は聞き逃さなかった。

まだまだ子供扱いされているようには感じるけど、はじめの言葉とは違う。ようやく存在を認められたという嬉しさが、心からこみ上げてきた。

……なんというか、安心した。

このままじゃ、僕が僕じゃなくなってしまうんじゃないかって、ずっと不安だったのだ。

「じゃあそろそろ、ご飯食べよっか。私がつくるから」

姉は椅子からすっと立ち上がると、僕にそう言った。

「ありがと……」

自然とそんな言葉が口から溢れる。小さい声だったし、自分でも相変わらず素直じゃないなと思ったけど、これで伝わってくれるはずだ。

「なに言ってるの。響は家族でしょ？」

そんな僕のかすかな声を聞き取ったのか、キッチンの前で準備を始める姉がそう言った。

なぜだか、嬉しかった。至極当たり前という顔だったのが、また嬉しかった。

「……お姉ちゃん、ありがとう！」

さっきよりも大きな声で、なるべく伝わるように、僕は伝えた。

こんな姿になって、もう明日からでも大変なことはあるだろうけど、それらをすべて忘れられるような、そんな根拠もない自信が沸き立ってくる。

今まで十何年と一緒に暮らしてきて、これほどまでに頼もしい姉の姿を見るのは初めてかもしれない。それがまた、嬉しかった。

――と思った矢先。

「やっぱ響ちゃん、かわいいねぇ!!」

頭をわしゃわしゃと、無茶苦茶に撫でられた。ただでさえ長い髪が、ぶわぁっと跳ね上がる。顔が真っ白な髪で覆われて鬱陶しい。

ああもう。今の今まで、いい姉だなって思ってたのに！

「ちゃん付けするな！」

「そんなこといわずに」

手のひらをすぐに返されて、僕はまた怒鳴ってしまう。けどやっぱり威圧は全くと言っていいほどに足りなくて、どうしても子供のワガママに聞こえてしまう。非常に不本意である。姉のケロッとした顔も余計に腹立たしかった。

「私は今の姿のままでも、全然いいと思うんだけどね」

「よくないっ！」

僕は、また声を荒らげた。もう何度目かは分からない。

……これから、お父さんお母さんにも説明しなくてはならない。学校のこともどうにかしないと。この体の生活にも慣れないと。もちろん、原因も戻る方法も考調べないといけない。もしかしたら、あの猫のことが関係しているのかも。

そう考えると、結構大変そうだ。

「はぁ……」

僕は、深いため息を吐いた。

了

混昔物語

若葉

むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんがおりました。

ある日、おじいさんは山へ竹を取りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

いつものように竹を取っていたおじいさんは、光り輝く竹を見つけました。不思議に思って近づいてみると、とても温かい光が竹から溢(あふ)れていました。光る部分の節を切ると、中にはたいそう小さな女の子がいました。おじいさんは、

「放っておくわけにはいかん」

と思い、女の子を連れて帰りました。

一方、川で洗濯をしていたおばあさんは、川の上流から大きな桃が流れてくることに気付きました。おばあさんは、

「これを持って帰ったらじいさんが喜ぶのう」

と思い、桃を拾い上げました。

夕方。おばあさんは泣きじゃくる女の子をあやしながら、おじいさんに大きな桃のことを話しました。

「それはすごい。早速食べよう」

おじいさんは大きな包丁を取り出し、桃を真っ二つに切ろうとしました。

しかし、包丁は途中で止まってしまいました。不思議に思ったおじいさんは、今度は上のほうを切り取ってみました。すると、中が空洞になっており、そこに男の子がいるではありませんか。おじいさんとおばあさんはたいそう驚きましたが、男の子が泣き出すとすぐにあやし始めました。

おじいさんとおばあさんは、竹から出てきた女の子にはかぐや姫と、桃から出てきた男の子には桃太郎と名付け、大切に育てました。

いくつもの年が過ぎました。かぐや姫はとても美しくなり、桃太郎はとてもたくましくなりました。二人はとても仲が良く、近所の評判もとても良いものでした。

ある日、桃太郎が村を歩いていると、

「山に鬼が住み着いているらしい。怖くて夜眠るに眠れねえ」

という話を耳にしました。桃太郎は腕に自信があったので、鬼を退治することにしました。

夜、おじいさんとおばあさんにそのことを話すと、やめたほうがいいと反対されました。しかし、桃太郎は

「この村が襲われるかもしれない。鬼が油断しているうちに倒すべきだ」

と強く言い張り、ついに許しを得ました。

次の日の朝。桃太郎は、おじいさんから鎧と刀、おばあさんから吉備(きび)団子を三つもらいました。

それらを受け取った桃太郎は、すぐさま鬼退治に向かいました。

山への道中、桃太郎は吉備団子を一つ落としてしまいました。それを犬が食べると、突然犬が話し始めました。

「鬼退治に向かうワン？　僕にも手伝わせてくれワン」

驚いた桃太郎はしばらく呆然としましたが、すぐに気をとりなおし、

「いいとも」

と返事をしました。

「ぜひとも力を貸してくれ」

「わかりましたワン」

こうして桃太郎一行に犬が加わりました。

桃太郎は、この吉備団子を動物に食べさせると知性を持ち、仲間になってくれるのではないか、と思いました。試しに近くを通りかかった猿に食べさせると、猿は人の言葉を話しました。

「やあやあ、俺も仲間に入れてくれよ」

桃太郎は確信を持ちました。一行は猿を仲間に入れ、山へと入っ

ていきました。
山の中に入ってすぐのことでした。犬が、
「助けを呼ぶ声がするワン」
と言って駆けていきました。一行は犬についていきました。
すると、罠にかかった鶴がいました。桃太郎は罠を解き、鶴を助け出しました。
鶴は弱り果てていました。しかし、桃太郎が鶴に吉備団子をやると、たちどころに元気になりました。
「助けていただき、ありがとうございます。私もお供したいのですが、争いは好みません。ですので、別の方法で恩返しをしたいと思います」
そう言うと鶴は飛び立っていきました。桃太郎は困惑しましたが、気にせず進むことにしました。

そして、一行は鬼がいる広場まで来ました。そこではたくさんの鬼が酒盛りをしていました。
「鬼たちよ、ここで何をしているか」
桃太郎がそう声をあげると、鬼たちが桃太郎に気付きました。
「おうおう、俺たちゃただ酒盛りしてるだけだぜ」
「そうとも、前にいた山は追い出されちまったんだ」
ガハハハ、と笑いながら鬼が言いました。
「そうか。しかし、お前たちがここにいると俺たちは怖くて眠れない。悪いがどこかへ行ってくれ」
桃太郎がそう言うと、鬼たちはギョロリと桃太郎を睨みました。
「なんだと？　俺たちは何も悪いことはしてねえ。なぜ怖がるんだ」
「全くだ。俺たちはただ毎日酒を飲んで騒いでいるだけだ」
桃太郎は困りました。鬼たちが悪い存在だと思えなかったのです。
「なら山を降りて共に暮らせばよいではないか」
「駄目だ。人間は俺たちを見ただけで逃げてしまう」
「割と傷つくんだぞ」

桃太郎がどうしていいかわからず頭を抱えていると、突然声が響きました。
「それならば、良い方法があります」
それはかぐや姫の声でした。桃太郎は驚きました。
「何故ここに来たんだ」
「鶴が案内してくれたのです」
そう言うかぐや姫の後ろには、ついさっき助けたばかりの鶴がいました。
「一週間後の満月の夜、月から迎えが来ます。人間と協力してそれを追い返してほしいのです」
「月からの迎えだと？　誰を迎えに来るんだ」
「事情を話せば長くなるので後にしましょう」
かぐや姫は鬼に向き直りました。
「村の人たちには私から話をしておきます。どうですか？」
「山で暮らして良いってんなら協力しよう」
「こんな別嬪（べっぴん）さんに頼まれちゃ仕方がねえ」
「感謝します。桃太郎、あなたはおじいさんとおばあさんを連れて避難しなさい」
「それはできない。俺もお前を守りたい」
「私に求婚を申し出た五人の有力者にも協力を頼んでいます。鬼たちも協力してくれます。あなたがいなくても大丈夫ですよ」
「俺だけじゃない。鼻が利く犬、手先が器用な猿、空を飛べる鶴も一緒だ」
「そうですワン」
「絶対に守ってやる」
「私にも手伝わせてください」
かぐや姫はため息をつきました。
「わかりました。ですが、命を大事にしてくださいね」
「もちろんだ」
こうして桃太郎一向と鬼は、一週間後の戦いに備えて準備を始め

ました。
　時はあっという間に流れ、迎えが来る日になりました。村人たちは全員避難しましたが、おじいさんとおばあさんは残りました。
「儂らはそう長くない。最後までお前たちのそばへいさせてくれ」
「わかりました。……黙っていてごめんなさい」
「何を言うか。誰も死なせない。俺が守って見せる」
　村にはたくさんの兵士がいました。その全員が鎧で身をつつみ、刀や槍、弓を構えています。
「桃太郎、これを持っていてください」
　かぐや姫は三枚のお札を桃太郎に渡しました。
「このお札があなたを守ってくれます」
「ありがとう。さあ、危ないからおじいさんたちと一緒に屋敷の中へ」
　かぐや姫が屋敷へ入っていくと同時に、見張りをしていた鶴の
「来ました！」
　という声が響きました。
　兵士たちは一斉に矢を構えました。桃太郎はおじいさんからもらった刀を抜きました。犬は唸り、猿は顔をしかめ、鶴は世話しなく羽ばたき、鬼は空を睨み付けました。
　やがて、空から何かがやってきました。段々と近づいてくるそれは、とても神々しい光を放っていました。
「射て！」
　兵士たちが一斉に矢を放ちましたが、なぜか月の使者の元まで届きません。続いて猿が石を投げましたが、やはり届きませんでした。
　とうとう月の使者たちは地上へ降り立ちました。刀や槍を持った兵士たちが一斉に襲いかかります。
「静まれ」
　しかし、月の使者の一人がそう言うと、途端に兵士たちの動きが止まりました。月の使者は兵隊たちを無視してこちらに歩み寄ってきます。
「ガウッ！」
「おら！」
　犬が噛みつこうと飛び付き、鬼たちが金棒を振りかざしましたが、月の使者に届く前に不思議な力によって止められてしまいました。
「止まりなさい！」
「くらえ！」
　鶴が空から襲いかかり、猿が引っ掻こうとしますが、やはり届きません。月の使者が腕を軽く振るうと、犬、猿、鶴、鬼たちはふきとばされてしまいました。
「あっという間にみんなやられてしまった……」
　桃太郎は刀を一層強く握りしめました。すると、突然刀が光り輝きました。
「これは……いけるかもしれない！」
　桃太郎は刀を振りかざし、月の使者へ斬りかかりました。刀は不思議な力を切り裂き、月の使者の一人を切りつけました。
　すると、先程まで余裕たっぷりだった月の使者たちの顔色が悪くなっていきます。好機と見た桃太郎はさらに斬りかかりました。
　一人、また一人と斬っていく桃太郎でしたが、月の使者が放った矢が胸に刺さってしまいました。
「ぐあ！」
　すると、桃太郎の懐からお札が一枚飛び出し、そして燃え尽きました。それを見た桃太郎はかぐや姫に感謝しながら、再び月の使者へと切りかかりました。
　先ほどの矢で殺したと思い込んでいた月の使者たちは完全に油断していました。気が付けば月の使者はその半数がやられていました。桃太郎はお札を一枚かかげ、
「月の呪いを解け！」
　と叫びました。すると、動けなくなっていた兵士たちが動けるようになりました。桃太郎は最後のお札もかかげ、
「皆の傷を癒せ！」

と叫びました。元気になった犬、猿、鶴、鬼たちは、月の使者へと襲い掛かりました。

「総員、突撃！」

「おお！」

兵士たちも負けじと声を張り上げ、月の使者たちに襲いかかりました。

お札の力により月の力が通じなくなった彼らの攻撃に月の使者たちは分が悪いと判断し、月へと撤退していきました。それを見た桃太郎が声を張り上げました。

「俺たちの勝ちだ！」

「うおぉぉぉ！」

勝利の雄叫びが村を震わせました。その声を聞いたおじいさんとおばあさんはかぐや姫を抱きしめ、喜びの涙を流しました。

その後、戦いの功績が認められた鬼たちは村に住めるようになりました。今では村人たちの手伝いをしたり、用心棒として村を守ったりしています。

犬、猿、鶴は桃太郎たちと共に住み、おじいさんやおばあさんの手伝いをしています。

そして、桃太郎はかぐや姫と結婚しました。というのも、かぐや姫が「結婚の申し出が多くて困ります」と呟いたときに、おばあさんが「血は繋がっていないのだから、桃太郎と結婚すれば良いんじゃないかい？」と言ったからです。

こうして二人は夫婦となり、幸せに暮らしましたとさ。

めでたしめでたし。

了

ニンギョウ喜劇

えのぐふで

ワタシには姉が五人いる。フリーターの五女、負け続きのギャンブラーの四女、密売人の三女、売春婦の次女、そして国会議員の長女だ。こうして並べると長女がとてもできた人間に見えるが決してそんなことはなく、市議会議員との不倫関係と秘書への暴行問題が発覚しワイドショーを騒がせている、悪い意味での時の人である。当選してまだ一か月でこれだというのだから、もう少し続けていたらどうなっていたのだろうか、ということは想像したくもない。

そんなろくでもない姉たちとは対照的に、四人の弟たちは大したものだ。五男は一才にして英会話をマスター、四男は小学生で短距離走の世界新記録をたたき出し、三男は中学校の時に立ち上げた会社が成功し、年商数兆円とも言われる敏腕経営者。そして次男はテレビで見ない日、というより見ない時間がほとんどないほどの超人気アイドルだ。

そんな奇妙な姉弟に挟まれた私は、残念ながらしがない大学生である。

普通に勉学に励み、普通にバイトに汗を流す。本来正しい形であるはずの人生が、この家族の中にいるとおかしなものに見えてしまう。

そんな私は今日も今日とて一日の講義が終わった後でバイトに向かった。バイト先はコンビニだ。私がシフトに入っている夕方時は、授業終わりの学生や仕事帰りのサラリーマンで少しばかり賑わう。少し面倒な時間帯だ。

けだるげな気分にうなされながら、いつものように店の中に入ると、そこにはいつもと違う光景があった。

客が一人もいない――のは別にあり得る話なのでいいのだが、問題は店員が一人もいないということだ。レジには人が一人もおらず。店内をぐるっと見ても品出しをしている人も見当たらない。どうしようもなく無人のコンビニである。

ロッカーのほうにでもいるのかと、そちらのほうに顔をのぞかせるが、そこにもまた、人は居なかった。

はて、と首をかしげる。まさかこの時間帯に一人もバイトが入っていないなんてことはありえないだろうし、集団ボイコットでも起こしたのだろうか？　しかし、そこまで劣悪な環境でもないだろうに。

とりあえず当面は仕方がないと、私はおとなしく制服に着替えてレジに出る。誰も居なかろうと、仕事はこなさなければならない。

少しばかり棒立ちになっていると、誰かが入店してきた。ようやく仕事だ。

入り口を見ると、客は一人ではなかった。五人の女性達、言ってしまえば私の姉達だった。

「あら、愛する弟君ではないか。こんなところで会うなんて奇遇だとしかいえないね」

我が長女の声は思った以上にわざとらしく、白々しいものだった。私の仕事ぶりをからかうようなつもりで来たのだろうか。そんなことより真面目に生きてほしいのだが。

次女は化粧を忘れでもしたのだろうか、狐面（きつねめん）を被っている。所々に細かい装飾がなされていて妙に洒落（しゃれ）ている。ほかの三人は何やら食べている様子だ。何かの肉だろうか。見たことのないようなものだったので聞きたい気持ちに駆られたが、仕事中なのでやめておいた。

長女の下手な芝居以外は、特に姉達から何か言われるというようなこともなかった。彼女たちは店の中をあらかた物色した後、何も買わずに去っていった。しばらくするとテレビ局の記者達が店に入ってきて、長女の居場所を問いただしてきた。まだまだ彼女はテレビに引っ張りだこだろう。面倒くさかったので、適当な場所を言って追い払った。

さてあの愚かなる姉達が帰ってしまうと、いよいよやることがなさそうだ、レジ打ちの練習でもしてやろうかと思った矢先、一人の少女が小さく泣きながら入店してきた。

見たところ小学校低学年、もしかすると幼稚園児かもしれないという風貌だ。こんな子供が一人で何をしに来たのかと思うと、こちらに向かって少女は言った。

「……わたしのおにんぎょう、どこ？」

そんなことを聞かれても、と答えてしまいそうになったのをぐっとこらえた。こういう性格は直したほうがいいだろう。私は屈んで少女と目線を合わせる。名前は？　お母さんはどこ？　そういうことを聞いてみるが、さっきの言葉を発した後はすっかり押し黙ってしまった。困ってしまった私は少女の腹の音に気づき、とりあえず何か食べさせようと思った。弁当の棚を見に行くと、商品がごっそりと減っていた。姉達は後で本気で懲らしめなければいけないようだ。適当な弁当を取り、自分で買う。そういうところはきちんとしなければ。

少女が食事をしている間に、私は弟に電話した。相手は三男だ。

電話をしてから十分ほどして、彼はコンビニにやってきた。少女と私を一瞥して、私に事情を聞いてきた。あらかた説明すると弟は納得した表情で、

「わかったよ、そういうことなら仕方ない。僕がしばらくこの子を預かるよ。こんなにかわいらしい子なら一人増えても二人増えても、いくら増えても大歓迎さ」

私の偉大なる弟は快く少女の保護を引き受けてくれた。さすが重度の少女趣味だ。もうこの男は二百人以上は手中に収めていることだろう。

非常事態を片付けるうちに、いつの間にかバイトの時間は終わっていた。どうなることかと思ったが、意外と時間はすんなり経ってくれたようだ。

私はすぐに家には帰らなかった。今日は次男と食事の約束がある。忙しすぎて中々家にも帰ってこないあいつとは、たまにこうして外食をしている。待ち合わせた小さな居酒屋で、私は弟と近況を報告し合った。と言っても、私の生活は大して変化はないので、ほとんどは弟がしゃべっているだけなのだが。最近は忙しさがさらに加熱していて、仕事をこなすために分身の術を会得したという。いやはや、さすがとしか言いようがない。

彼と別れ、今度こそ私は家路につく。途中のゴミ捨て場から異常な匂いがしたので覗いてみると、野良猫がビニール袋の中に頭を突っ込んで食料を漁っていた。袋の中身は暗いせいでよく見えなかったが、どこかで見たことのあるような形状をしていた。

家に帰ると、五男と四男はすでに就寝していた。まだこういう所は子供のままだ。他の姉弟は帰宅していなかった。忙しい人たちだ。

そういえば、と思い立って私は五女に電話をかけた。今日食べていたものを聞いてみると、どこかばつの悪そうな様子が電話越しで伝わってきた。しょうがないので自分で記憶をもとに調べてみることにした。しばらく調べた後、私は結果にたどり着いた。まさかと思って三女に確認を取ってみると正解だった。どうしようもなく気持ち悪い気分になったので、そのままベッドに潜った。

◇　　◇

朝起きると、家がなくなっていた。

いや、この言い方は正しくない。正確に言えば、家の中のものが全て、すっきりなくなってしまっていた。体にかけた毛布も剥ぎ取られていた。

どうやら我が家族は夜逃げをしたらしい。普通の私だけを置いて。

困ったものだと思ったが、私には幸いにできた弟達がいた。三男にアパートの部屋を貸してもらい、そこに住むことになった。交換条件として、彼が保護した少女達の世話をすることとなった。

保護施設の話は聞いていたが、顔を出すのは初めてだ。どんなも

のだろうかと不安だったが、行ってみると人はほとんど居なかった。というより、昨日の少女しかいなかった。三男に聞いてみると、もう他の子供達は送り出したと言っていた。本当にこの弟は商売に魂を売ったような男だ。

私は少女にできる限りのことをした。美しく着飾り、みっちりと教育を施した。数ヶ月すると、彼女も他の人たちと同じように送り出されていった。

私はそれから、入れ替わり入ってくる少女の世話をしながら大学に通い、やがて立派な警察官となった。

私の最初の仕事は、六人の男女の逮捕だった。

人の肉は、とても食えたものではなかった。

了

ドン！！

イラスト作品

作：さん

date

ズゴゴゴゴ…

自己紹介

HN：キツタヌ

- 文章班
- 物質科学工学科
- ゲームは好きだけど苦手
- 焼肉屋さん太郎が好き
- 本名は禿げリーゼント

小説班のえのぐふでです。
基本的に表に出るタイプではないです。
顔は覚えなくていいので名前だけ憶えていってください。
作品を読んで僕の顔を想像してみるのもいい暇つぶしになるかもしれません。
ごくまれに部活に出ていることが天文学的確率でありますので、その時は仲良くしてあげてください。

kuroma

音楽班に所属しているひっそりとした奴です。

音符（♬←こんなのとか）をひたすら並べて
たりシンセ系（他にもそういうのがある）のつまみを
ひたすらいじり倒したりしています。

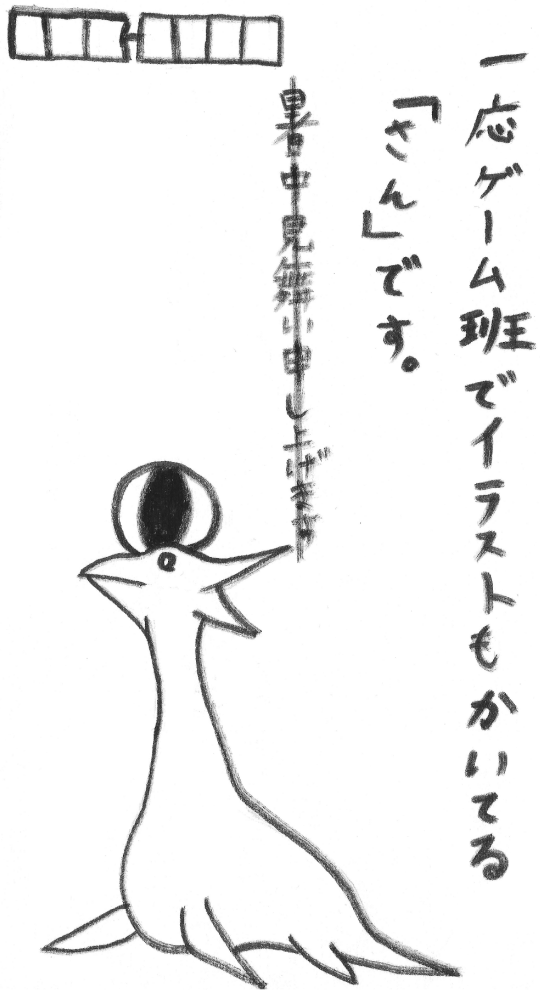
普段の活動は個人だったり秋の CD 制作に力を
注いだりゆる〜くやっとります・・・

今年はいっぱい曲を作るぞ〜〜〜！

ダニイムです!!
ポケモンやバラクエをよくやってたり。
大体部室に入りびたってます
天文班です。
よろしくおねがいします。

進捗ダメです

しゅう



TEXTER

自由な
創作活動

▷小説
イラスト
ゲーム
音楽

小説
「元同級生」
等

ゲーム
「LightsOut
Machines」

(どちらも現視研公式HPから閲覧・プレイできます)

如月　吟(18)

奈良高専電気工学科所属

文章班

文章班募集中です☆

ハンドルネーム ： Anto

来年三年生（予定☆）になる情報工学科
イラスト班のAntoです！

ところで蟻って日本だと280種類以上、世界だと11500種類以上いるんだって！
やつらどんな高さから落としても死なないし全世界の人間の合計体積よりも全世界の蟻の合計体積の方が多いらしいよ！！
凄いね！

何が言いたいかってあいつら家に入ってくるとめっちゃ大変だから皆も用心してくれよな！
(あと白蟻は蟻じゃないぞ)

若葉

４年　情報工学科

情報工学科だけどPCとかIT関連はほとんど知らないので頼らないでね（震え声）

まあとりあえず、

よろしくな

あっこどん

☆現視研の会長
☆イラスト班
☆某刀の育成ゲームが好き
☆ポンコツ
☆ごく稀に推しに関わる運が極振りする(実績は本人に聞いてほしい♥)
☆ポンコツ
☆こんなヤツですがよろしくお願いしますゞ(*´∀`*)ノ

速さが足りない。

新4Sのくろうとです
イラストを日々練習しております

基本的に部室でエンカウントできるので気軽に話しかけてください

猫にゃん

twitter ID:@inaba31415

表紙を描かせていただいた猫にゃんです。
ふだんはツイッターで動物たちが女の子の姿になって「たーのしー!」なアニメの二次創作をしています
よろしければそちらもぜひ

あとがき

こんにちは！　編集を担当しております、「しゅう」という者です。現代視覚文化研究会の春会誌『Alchemy』をお読み頂き、ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

恐らく今読んでくださっている方は、大体2018年度の新入生だと思います。その中には、この現視研に興味をもってくださった方もいるかと思います。私は（無事に進級できれば）二年生なのですが、「もう一年経っちゃったかぁ……」と入部したときのことをしみじみと噛み締めております。いやぁ、あのときは少し驚きましたね。みなさん、ゲームしてたんですよ。

あれは体験に行ったときのことでしたね。どんな部活なのだろうと、心臓をドキドキとさせながらドアを開けました。そこには、特段広くはない部屋に、部員が五、六人。机には乱雑に広がるカードゲーム。なんだこれは、と正直思いました。少なくとも、「現代視覚文化研究会」なんていうカッコイイ名前で想像していたのとは、ちょっと違いました。まあ、参加させていただきましたけどね。すごく楽しかったです。

見ての通り現視研というのは、本誌のような部誌で小説やイラストをかいたり、さらには音楽やゲームをつくったり、幅広く創作活動をしていこうという部活です。「校内同人サークル」という例えが適切だと思います。

やっぱり、創作する同好会だけあって皆さんスゴイです。文章がうまい先輩、絵がうまい先輩、作曲のできる先輩、ゲームをつくれるフレンズ……そういう人たちが部室にいて、色々と教えてもらうことができるのです。

あとは、やはり雰囲気が自由なことが良い点なのではないでしょうか。最初でも書いたような、部室でワイワイゲームをするような同好会です。家で一人粛々と創作をしても良し、みんなでわいわい集まりながらでも良し、部費500円だけ払って一切活動しない幽霊部員でも良し（よくない）、という感じなのです。

他にもたくさん、良いところはありますが。例えば、部員なら「資料」と称したラノベやマンガが読み放題、とか。まあ、この辺りは、どこかにも書いるかと思うので、具体的なことはそちらを読んでいただけると良いかと思います。

尺もいい感じなので。最後に、入部するか決めあぐねている方に向けて、アピールをさせてください。

ズバリ、現視研へ入るのに技術は必要ありません！　絵がかけない、文章もそんなに上手くない、音痴だしプログラムもわかんねぇ、という人でも500円払い続ければ部員です。

……というのは極端かもしれませんが。別にものすごい熱意がある必要はないのです。「なんか作品つくってみたいなぁ」「みんなでゲームしたいなぁ（鼻ほじ）」ぐらいの、弱火の熱意で構いません。

作品の完成度で文句を言われることも、もちろんないです。

ただただ自由に楽しんで、まったりと、みんなで創作活動をしていきましょう！　イエーイ！

しゅう